

自分の好きな遊びに没頭する中で 「学びに向かう力」を育む

幼稚園の自由遊び

私が訪問しました

福岡県立ありあけ新世高校
前川修一

まえかわ・しゅういち



◎教職歴 25 年。同校に赴任して1年目。定時制 4 年生担任。進路指導部。担当科目である日本史の授業でアクティブ・ラーニングをいち早く導入。学校を超えて教師が集まり、授業改善について考える研修会を継続的に開催し、全国の高校教師のネットワークづくりにも貢献する。

福岡県立ありあけ新世高校

全日制・総合学科/定時制・普通科/共学/全校生徒 494 人/2019 年度進路実績：進学 123 人、就職 41 人。校訓「自律・自彊・飛躍」の下、「新世生よ、人生のプロデューサーたれ」を校是とし、充実した高校生活を送ることによって、社会で自立できる力を育む。

私が案内しました

福岡県・私立
きらきら星幼稚園
黒田秀樹

くろだ・ひでき

◎きらきら星幼稚園理事長・園長。全日本私立幼稚園幼児教育研究機構理事。「幼児教育では、縄跳びが 100 回飛べる子と1回しか飛べない子に優劣の差はありません。大切なのは回数ではなく、挑戦したいという気持ちが芽生えているかどうか、その子なりの課題がクリアできたかどうかです」

福岡県・私立きらきら星幼稚園

40年以上かけて園長自ら1本1本植えた樹木など、自然豊かな園環境で子どもの自由な遊びを促す。また、遊びの中で学びに向かう力や非認知能力、社会情動的スキルを育むため、保育者の資質と専門性の向上を図る園内研修にも力を入れている。園児数約 300 人。

砂で作った「プリン」を並べてお店屋さんごっこを楽しむ子どもたち。大きさや形、飾りつけ、並べ方にも一人ひとりの気づきや課題が見られ、保育者はそれを学びの芽として拾い上げる。

まん丸でつるつる、落としても割れない泥団子作りに何日間もかけて取り組む。保育者は、自作の泥団子をモデルとして見せるが、作り方は説明しない。子どもたちは先生の泥団子を見て、自分なりの目標を設定し、ほかの子の作り方も参考にしながら試行錯誤を続ける。

前川 泥団子作りやお店屋さんごっこ、昆虫探しなど、子どもたちはそれぞれ自分のやりたい遊びに没頭していましたね。そんな中で、泥遊びをしている子の近くで遊んでいた子が、「これ、使ったら？」といった表情でそっとスコップを置いていくなど、子ども同士が協働する瞬間がたくさんあることに驚きました。自分の好きなことをしながら、「どうすればいいのかな？」と目標や課題を見つけ、「こうしてみよう！」と学びや気づきを得ている。しかも、そこに子ども同士をつながりがある。保育者の存在を感じさせない子ども主体の遊びの中で、不規則だけれど様々な力を子どもたちが発揮していることに感動しました。

黒田 幼稚園では、遊びを含めた生活の中で、保育者やほかの子どもなど、自分の周りの環境すべてとかわりながら学びに向かう力を育みます。中でも、自分の好きな遊びを自由に楽しむ自由遊びは、主体性や思考力を育む上で最も大切な時間です。ただ、幼児期の発達状況は月齢によっても大きく異なりますし、一人ひとりの興味・関心や遊びの中で生まれる課題も様々です。子どもたちの状況を見ながら、園庭に土の山を作っ

園の環境は人為的につくられたものなのに、そこでの時間も遊びも自然であることに感動しました



目の前のその子の遊びを見守るのか、それとも介入するのか、援助のあり方を保育者はその子と一緒に模索していくのです



たり、スコップなどの道具をそろえたりして、「こうしてみたらどうなるかな？」などと、遊びの中で学びを促す環境を意図的につくる必要があります。そして、目の前の子どもにどのようなようにかわるとよいか、その子のことを理解しながら、保育者としての援助のあり方を模索します。決まった正解がないからこそ、私たちは、計画以上に保育者同士の対話を通して振り返りを大切に行っています。

前川 園児は、自分の奥底にある欲求にしがたって遊ぶうちに、それが自然に学びにつながっていく……これは、だれもが生得的に持っている学びの意欲と云えるでしょう。その意欲を掘り起こしさえすれば、高校生も園児のように何かに没頭する時間を取り戻せると思います。

黒田 子どもは生まれながらにして有能な学び手です。同じ内容を一斉に学ぶことにも価値はありますが、その子が学びたいことを学べる時間が小学校以降もっと増えてほしいと思います。

前川 教科書で学んだことを活用しながら、各々が学びたいことを探究する授業は、簡単ではありませんが、だからこそ実現を目指していきたいです。生徒の主体性に任せる時間をつくり、一人ひとりの気づきを待ちたいと思います。

今日の学びを
自校の指導につなぐ

● ● ●

没頭する「童心」を
生徒が取り戻していく
授業を実現したい



園児の遊びの環境に自然に溶け込む保育者の姿を見て、主体性は教師に強制されるものだと改めて実感しました。「自分は、生徒に主体的であることを強いてはいないか」と、教師として自問しました。ただ、生徒は幼児期に持っていた学びの意欲を忘れ、授業は教師から教えてもらう時間だと思ってしまうことも事実です。そして、教える代わりにする教師の授業を黙って聞きます。しかし、そのような授業では、彼らの心はそこにはありません。自分から学ぶことを忘れかけている生徒が、童心を取り戻すような授業を実現したいと思いました。

土の山から水を流すと水路ができる。それを見て、水を貯める場所を作る子どももいれば、新たな水路を作る子どももいる。子どもたちはそれぞれに課題を設定し、遊ぶ中で、次々と新しい課題が生まれ、遊びが展開されていく。